

# 子ども達が伝える地域の文化財

## 清崎の天神様のお祭

東風吹かば

匂ひおこせよ  
主なしとて梅の花  
春を忘るな  
菅原 道真

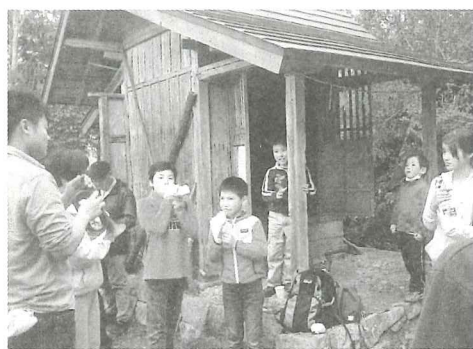
梅の花が香りを風にのせその想いを送る頃。春休みの一日。清崎の天神山は、学問の神様、菅原道真を祀る子ども達の躍動で活気づきます。ここでは、子ども達が祭りを創ることで、自分自身を創り出しています。

平成六年の清嶺中学校PTA新聞「つりばし」第四号に、清崎の天神様の記事が掲載されました（一部抜粋）。

「ごめんどさい。天神様の寄付をお願いします。」  
「おお、天神様が始まるかん。ご苦労だのん。学問の神様だ、しっかりやりやあ頭がよくなるでがんばりんよ。今年も五百円でいいかん。」  
「おつ、天神山でラッパが鳴つとるぞ。集合の合図だ。今日の仕事は小屋作りかなあ。」



お祭りの準備



ラッパやホラ貝の吹き方を教えている

「今年の大将はNさんとのK君だよ。もう中学二年生になったんだねえ。早いもんだねえ。」  
「家の子も小学校三年生になつたんで、天神山の仲間になれて喜こんどるに。くじをどうやって作つたとか、小屋はどうやって作るだとか、天神様のことばつか話しとるに。」

「お祭の日には荷物をしょって天神山に登るで、背負板を持って行くとつてたが、家では背負板なんかしよつたことないけど大丈夫かねえ。」

「家じゃあ何もやらせんもんで分らんけど、あれで結構年上の子んとうが、小さい子の面倒をみてうまくやつとるぞん。何のこたあない。自分達も、年上の子達に教えてもらつたことをそのまま教えとるだけだかねえ。」  
「あんた、よく知つとるねえ。」  
「実は、本当は子どもんとうだ

けでやらせてやらにやあと思ふだのん、子どもの数が少ないもんで、ちよつと手伝つてきただえ。なんしよ、こう少なくなっちゃあ、子どもんとうも大変なことだぞん。」

今から、もう二十三年も前の記事です。

こう記されてから、二十余年も経つた今も、天神山のお祭は子ども達を中心にして継続されています。

記事面に見られるような、大人による遠慮がちなお手伝いもありました。男子だけでなく、女子も参加した運営への移行もありました。

そして何よりも大きな変容は、運営参加者の地域的拡大でした。古くは、天神山麓集落の子どものだけの運営でした。今はその範囲が拡大しています。これは深く大きな理解なくしてできる内容ではありません。並々ならぬ協力をいただいでいるの継続です。子どもだけでなく、子どもを取り囲む大人の深い愛情と地道な

努力と広い心があつたればこそ継続であり、子ども達の努力と大人の努力とによる継続だと思えます。

天神様は、江戸時代になると、勉強の場である寺子屋にも祀られるようになりました。寺子屋の行事には、書初め、節句、七夕会等がありました。

そして、寺子屋独自の行事として天神講がありました。

天神講の起源は、菅原道真の命日に寺子たちが米や野菜を持ち寄り、供物や灯明を献じて道真公を祀つた後、師匠を囲んで会食を楽しんだことにあるようです。講の日は、道真公の命日である旧暦二月二十五日とされました。

清崎の天神様のお祭も寺子屋の天神講に起源があると思えます。天神講が、清崎でいつ頃から始められたかは明確になっていません。しかし、天神山山頂の祠に安置されている天神尊像厨子の裏に、一八一九年（文政二）斧吉始め十四人が、天神尊像を多寶寺十一世龍山に寄付したことが墨書されています。

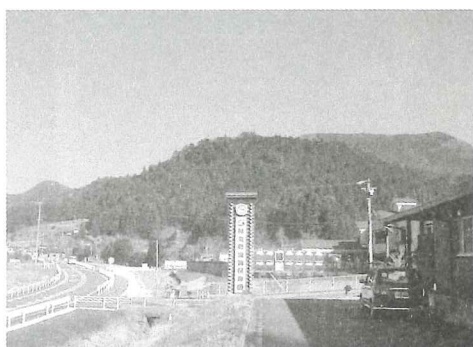
また、「愛知県寺子屋一覽」には、一八五四年（安政元）東田内村多寶寺十五世菅沼道香和尚を師匠とし寺子屋が開かれていたと記されています。これらの記録から、江戸時代後期には、多寶寺でも住職が寺を開放し、自ら師匠となり、子どもの教育にあたつていたことがわかります。そして、天神尊像が和尚さんに寄付されたことから、天神講が行われていたことを推察することができます。

今年も、三月二十五日祭日。清崎では、その日の数日前から子ども達が集まり、寄付集め、道作り、清掃、くじ引き作り、小屋掛け等の準備を万端整え、祭りの日を迎えます。山頂で鳴らすホラ貝とラッパの合図で待ち構えていた老若男女が参拝に登り、山頂の祠で参拝し、引いたくじ引きの賞品に話題をはずませながら下山します。

標高四二〇mの天神山は清崎のシンボルです。

（設楽町文化財保護審議会委員

加藤 紘市）



清嶺保育園より天神山を見る